

蔡の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

④

寛永の高尾山復興

荒廃した高尾山の復興を期して、二〇世寛秀が醍醐寺から関東へ下向した。江戸後期に作成された歴代山主に関わる記録は、寛秀の晋山を元和六年（一六二〇）のことと述べている。

寛永の高尾山復興

寛秀が翌年の二月、四日に山城国醍醐寺の田中坊において無量寿院正嫡堯円から付法を受けたことは醍醐寺側の記録にもあり、同年の在任には一定の根拠がある。一方、前年の元和六年を九世源惠の寂年としているが、この年次は根拠が明らかではない。前号で指摘したように源惠は弘治三年（二五五七）の印信にその名が見えるので、少年

期に付法を受けたとしても六三年後の元和六年には齢八〇近くとなる。先の記録の寛秀の晋山は年を示すだけで月日が明らかでなく、在住が確実なのは翌七年ともいえる。むしろ、源惠の寂年はさきに遡り、寛秀晋山までならば高尾山が無住であったことを示唆しているのかも知れない。果たして、晋山した寛秀の目前には、廃寺同然の光景があったのだろうか。

三年の後、改元して寛永年間（一六二四～四四）は高尾山復興の時代となる。とは言え、その内実に関わる記録はほとんど無く、多分に推測を交えた話となる。寛永の復興を直接裏付ける文面は、八年三月の寺鐘の勸進帳

とその古鐘の銘文くらいである。その鐘（寛永古鐘）は現在大本堂の傍らに安置されている。建築としては奥之院不動堂が建築様式からその時期の創建と推定され、東京都の重要文化財に指定されている。江戸後期の絵図には現在大本堂のある一面に三棟の堂が並んでおり、奥之院不動堂はこの内西側の護摩堂であった。同様の様式ながら中央がやや大きく葉師堂、反対側に大日堂（現大師堂）があった。

寛永一四年の林野争論関係史料には「飯縄葉師堂宮」「葉師堂の近所いづなの宮」という文言がある。この時期、葉師堂、鐘、そして規模や位置は不明だが、享保期（一七二六～三六）に現存の建築が建立される以前から飯縄宮が存在したことが確定できる。先の三棟の堂は同じ時期に整備されたのか、あるいは当初葉師堂として建てられた堂が後に護摩堂とさ



現存する寛永復興期の建造物である奥之院不動堂

れた可能性も無くはないが、仁王門は仁王像の胎内から発見された銘札から延宝五年（一六七七）十一月晦日の火災による被害がわかっており（貞享元年・一六八四再建）、この時葉師堂の被災も判明している。遅くとも一七世紀の半ばには一帯の伽藍整備が成つていたものと考えられる。

寛永という時代

さて、寛秀による復興がどのような財政的裏付けによって成し遂げられ

たのかは残念ながら皆目見当が付かない。そうすると、社会的な背景から類推する外ないが、この時期は上野の寛永寺が創建され、京都でも東寺の塔、清水寺本堂、南禅寺三門などが建立されており、江戸近郊では目黒不動で知られる瀧泉寺の伽藍が再興されたのが寛永の二年である。

寛永初年に制作された江戸図屏風には、大名屋敷の白壁が整然と並び、日本橋界隈を中心に形成された町場が賑わう様子



現存する寛永古鐘
復興期の貴重な遺産

移封となつた紀州家初代頼宣であつたが、故地の駿府を兄秀忠が寵愛する甥の忠長に譲る形と

徳川頼宣と慶安事件

元和五年（一六二九）に和歌山へ

その後、寛永の一〇年代は飢饉が続き世情も安定しなかつたようだが、このような中、一四年一〇月には島原の乱が勃発する。島原城下における一揆勢の蜂起と原城への籠城。これには浪人が多く関与し、鎮圧に出た

幕府方には多くの犠牲が出た。同五年の幕政改革においては土井利勝・酒井忠勝ら遺老に対し、新進の松平信綱らが登用され老中合議による体制が整備されてゆく。

【参考文献】山本博文『寛永時代』（吉川弘文館、一九九〇）小山豊城『徳川將軍家と紀伊徳川家』（清文堂、二〇二二）

を見ることのできる。この大都市の建設にあつては相当な社会的余剰が発生したものと考えられる。それが寺社への寄進に振り向けられたことも充分考えられ、実際、寛永古鐘の勸進は好調で、三月に始まった勸進の結果、八月には鐘が鑄上がつていることが銘文からわかる。江戸建設にともなう経済バブルを背景に、近郊に位置する高尾山の復興も成し遂げられたのではないかと、いちおうの推測をしておきたい。

幕閣宿老の連署による高尾山中の通り抜け禁止についての議定書である。そこでは、所轄の八王子代官岡上甚右衛門景親に対し、「高尾山参詣にまぎれ通る事これあるべく間、女ならびに手負その外不審なる者、すぐに通り抜けざるよう」と下令している。このことは、すでにこの頃、高尾山への参詣者が相当数あることを裏付ける一方、麗々しい將軍の城下建設とは裏腹に、未だ世情には不穏な空気が存在したことをも示している。

寛永九年正月に大御所秀忠が死去すると三代將軍家光の親政が始まる。同年、熊本五二万石の加藤忠広（清正の子）改易。次の年一〇月に家光が病の床に伏すと、何と頼宣擁立の噂が流れる。間もなく謹慎中の忠長は自害を強いられ、着々と脅威は除去されるが、三代家光の立場が盤石ではなかつたことが知れる。

一般に、三代家光の治世を徳川政権の確立期とする見方があるが、家光死去の直後、幕閣を震撼させる事件が起きる。慶安四年（一六五二）、由井正雪を首謀者とする倒幕の陰謀事件である。徳川政権に不満を持つ浪人を糾合し、江戸で丸橋忠弥が、大坂で金井半兵衛が蜂起する計画であつたが内通によって計画は未然に洩れ、丸橋召し捕りによつて未遂に終わった。

頼宣は寛永の復興を期して権力を奪取するという風潮の残る時代であつたが、以降、浪人の大量発生を防ぐ意味でも諸大名の改易は減少し、世情も落ち着きを見せるようになる。